



Title	【定年退職教授の履歴および主要業績】 藤目ゆき教授
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2025, 51, p. 201-207
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100827
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【定年退職教授の履歴および主要業績】

ふじ
藤 め 目 ゆ き 教授

ふじ め
藤 目 ゆ き 教授

1984 年 3 月	京都大学文学部史学科卒業
1987 年 3 月	京都大学大学院文学研究科史学科現代史学専攻修士課程修了
1990 年 3 月	京都大学大学院文学研究科史学科現代史学専攻博士課程単位取得満期 退学
1995 年 3 月	京都大学大学院文学研究科博士号取得
1996 年 4 月	大阪外国語大学国際文化学科助教授
2007 年 10 月	大阪大学人間科学研究科グローバル人間学専攻准教授
2011 年 9 月	大阪大学人間科学研究科グローバル人間学専攻教授
2016 年 4 月	大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻共生学系教授

藤目教授は 1984 年 3 月に京都大学文学部史学科を卒業後、京都大学大学院文学研究科史学科に進学し、1990 年に修了した。1995 年に京都大学大学院文学研究科博士号を取得し、1996 年 4 月に大阪外国語大学外国語学部の助教授として着任した。その後、大阪大学と大阪外国語大学の統合に伴い、2007 年 10 月に大阪大学人間科学研究科グローバル人間学専攻に准教授として着任し、2011 年 9 月に同大学教授に昇任した。この間、藤目教授は長年にわたって学生の教育と学術研究に貢献し、2025 年 3 月 31 日限りで定年退職するものである。

藤目教授は、日本近現代史、女性史、ジェンダー論、フェミニズム研究を専門とし、歴史実証研究において数多くのすぐれた研究成果を残し、一国史的で欧米指向の歴史観にとらわれない新しいフェミニスト歴史学の構築に寄与した。その学術的業績は国際的に高い評価を受けている。

1997 年に公刊された『性の歴史学—公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制』は「性と生殖」をめぐる近現代日本の国家的統制とそれをめぐる社会思想・社会運動の近現代史を対象として、性（ジェンダー）を階級・民族・セクシュアリティといった他の社会的カテゴリーと切り離すのではなく、それらを統合的に把握する視点から実証的に解明した歴史学の著作であり、第 17 回山川菊栄賞（女性問題に関する優れた業績に対して贈られる）を受賞した。現在なおセクシュアリティやリプロダクティブライツ、フェミニズムの歴史と理論に関する重要文献として引用・参照され、研究会のテキストとして利用されている。

『性の歴史学』出版後、藤目教授は冷戦時代のアジア現代女性史という新領域を拓き、きわだった成果をあげてきた。「東アジア冷戦とジェンダー」（基盤研究 C：2001-02 年

度)、「アジア現代女性史の研究：北東及び東南アジアの軍事主義とジェンダー」(基盤研究 A：2004-07 年度)、「アジア現代女性史の研究：冷戦時代の国際女性運動」(アジア現代女性史の研究：冷戦時代の国際女性運動とアジア)(基盤研究 C：2009-2011 年)、「冷戦時代の国際女性運動」(基盤研究 C：2012-2016 年)などの科研費を得て、アジア現代女性史の研究プロジェクトを推進し、タイ、ビルマ、中国、台湾、韓国、インドネシア、ベトナムの女性史に関する図書 8 冊を監修・刊行した他、2004 年にはアジア現代女性史研究会をたちあげ、2005 年以来、同研究会代表として内外の最新の研究成果を発表する年報『アジア現代女性史』を編集・発行し、現在までに 16 号を出している。

これらの研究プロジェクトを通して藤目教授は、第二次世界大戦後の連合国占領が日本民主化と女性解放をもたらしたとみなす「成功した占領」という戦後の神話に挑み、数多くの成果を挙げた。これに関する研究成果のひとつは、GHQ の「廃娼令」や米軍の売春禁止主義を高く評価する従来の定説を覆し、第二次世界大戦後、戦前・戦中の公娼制度が冷戦に照応して米軍に好都合な様式の性統制主義へと再編成された過程を解明し、売春禁止主義と軍事主義が密接に結びついてきた事実を明らかにしたことである。これを論じた論文 *Japanese Feminism and Commercialized Sex: The Union of Militarism and Prohibitionism* は、東京大学社会科学研究所 (ISS) とオックスフォード大学出版局 (OUP) が協力して編集・発行する国際的ジャーナル *Social Science Japan Journal* (SSJJ) に 2006 年に発表され、2007 年 2 月に 2006 ISS/OUP Prize が授与されている。

また、藤目教授は冷戦時代のアジア女性史に関する研究成果として、アジア諸地域における女性の経験を、たんなる被害者、受難者の経験としてのみならず、抵抗や変革の主体としての経験に着目し、草の根の女性史を掘り起こしてきた。性売買街、軍事基地・被差別層とエスニックマイノリティーのコミュニティに焦点をあて、フィリピン、韓国をはじめ、ベトナム、タイ、台湾、カンボジア、インドネシア、モンゴルなどアジア諸地域の女性史調査を重ねており、また、日本国内でも各地のフィールドワークを進めてきた。それらの成果はアジア現代女性史シリーズの各巻図書・論文として発表されている。とりわけ『女性史からみた岩国米軍基地—広島湾の軍事化と性暴力』は、本州の軍事基地を女性史の視点からとりあげた労作である。

これらの業績から藤目教授は女性史とフェミニズムの研究者として知られているが、藤目教授の研究は狭い意味での女性史・フェミニズムに限定されるものではない。むしろ、『性の歴史学』以降、女性に対する差別・暴力・支配といった問題を民族や階級をめぐる権力関係と重層的複合的に把握しようとするのが藤目教授の一貫した姿勢であり、狭義の女性史・フェミニズムの枠に収まりきらない数々の研究成果を挙げている。なかでも代表的な著作は、20 余年にわたる連合国対日占領に関する調査成果をまとめ、9 巻に及ぶ一次史料の資料集とともに上梓された『占領軍被害の研究』である。終戦後、連合軍占領下に置かれていた 6 年 8 ヶ月の間、日本国内では占領軍に起因する事件や事故によって、旧植民地出身者を含む、日本在住の民間人が死傷する事件が無数に発生し

ている。同書は、戦争が終了しても、一般市民生活に対する抑圧と被害が形を変えて続くことを明らかにし、戦争の市民生活へのコストを再認識させ、日本の戦後のあり方を別の視点から問い直した。断片的にしか知られていなかった、占領軍下の抑圧と被害についての情報が集約されて世に出たことが高く評価され、日隅一雄・情報流通促進賞 2022 大賞が授与されている。この賞は、表現の自由、情報公開、国民主権の促進に生涯を捧げた日隅一雄の理念を基に日隅一雄・情報流通促進基金により 2012 年に設立されたもので、公正な情報の流通の促進をし、真の国民主権の実現に貢献している個人や団体を顕彰し、支援を行うことを目的としている。さらに現在は、「朝鮮戦争の社会史—日本という戦域の女性と子どもたち」という科研の代表者として、「忘れられた戦争」と軽視されがちな朝鮮戦争を女性と子どもの視点から捉え直す挑戦的な研究のプロジェクトを進めている。

このように国際的な射程で日本近現代史に取り組む藤目教授の業績は、アカデミアの内外、国の内外で高い評価を受けており、社会的に注目されている。近年では、朝鮮戦争停戦協定 70 周年記念シンポジウム（京都市、2023 年 7 月 23 日）、ナショナリズムと性動員の連続と断絶を問う韓国・東北アジア歴史財団主催の国際学術会議（2023 年 8 月 11 日）、宮古島「慰安婦」のための碑 15 周年を記念する沖縄大学における国際シンポジウム（2023 年 9 月 9 日）、日本アメリカ史学会年次大会シンポジウム「アメリカの占領と植民地主義を再考する—アジア大陸の両端から」（2024 年 9 月 14 日）などで講演し、また、「占領軍被害でつなぐ「本土」と「沖縄」：差異と分断を超えて」（『世界』2022 年 5 月）、「「成功した占領」という戦後の神話」（『朝日新聞』2024 年 7 月 29 日）といったメディアの取材に応えたインタビュー記事を発表し、大きな反響を呼んだ。

なお、社会貢献の面では、藤目教授は奈良県や京都府からの嘱託を受けて行われた地域女性史編纂の指導をはじめ、日本近現代史やジェンダー論の専門知識を折々の機会に社会に還元し、地域の聞き取り調査や史料収集を支援する社会教育活動を展開した。このような活動を通して藤目教授は地域女性史サークルの設立や全国的な女性史交流集会の実現に寄与している。

大学運営の面では、藤目教授は 2006 年度と 2007 年度の 2 カ年にわたって独立行政法人大学入試センターの試験作題委員をつとめ、入学者選抜に大きく貢献したとして、2009 年に国立大学協会、公立大学協会、日本市立大学団体連合会の会長、大学入試センター理事長連名の感謝状を授与されている。その間、2007 年の大阪大学・大阪外国語大学の統合によって人間科学研究科にグローバル人間学専攻が創設され、さらに 2015 年には機構の再編成が行われて新たに共生学系が設置された。藤目教授はこのように刷新が続く人間科学部・人間科学研究科において近現代史、とくにマイノリティ研究と地域史研究の学術的蓄積を活かして多文化共生や地域創生といった分野の創設を担い、紀要『グローバル人間学』の編集（2009 年～2016 年）や教科書『共生学が創る世界』（2016 年）・『共生学宣言』（2020 年）の執筆などをはじめとして、教育・研究に寄与した。

さらに、大阪大学の前期日程に関連して学部を横断する作問と採点を実施するための連絡委員会委員長として全学に貢献し、また、人間科学部・人間科学研究科のハラスメント防止や学生支援、教育推進など各種の委員会委員・室員として尽力した。

主 要 業 績

主要著書

1. 『性の歴史学—公娼制度・堕胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』 不二出版, 1997.
2. 『女性史から岩国米軍基地—広島湾の軍事化と性暴力』 ひろしま女性学研究所, 2009.
3. 『「慰安婦」問題の本質—日本人「慰安婦」と公娼制度の不可視化』 白澤社, 2015.
4. 『占領軍被害の研究』 六花出版, 2021.

他 55 冊

主要学術論文

1. “Japanese Feminism and Commercialized Sex: The Union of Militarism and Prohibitionism,” in *Social Science Japan Journal*, Vol. 9, No. 1, 2006, pp. 39–50.
2. 「モニカ・フェルトンの軌跡 1952–1956」『アジア現代女性史』第 8 号, 2013 年 3 月, 6–38 頁.
3. 「朝鮮戦争と女性—WIDF 調査団が報告した民間人被害」『歴史評論』第 880 号, 2023 年, 29–39 頁.

他 52 編

その他、書評・事典・新聞投稿・研究ノート・学会報告などの記事・エッセイ 55 編

計 162 編